

社会科授業研究の教育実践学的方法論の構築をめざして
— 鳴門社会科教育学会研究大会シンポジウムから —

1 社会科教育研究の規定（梅津提案の整理）

- (1) 社会科教育実践の事実の分析、説明をする。
- (2) 社会科教育実践の事実内に内在する問題点を抽出する。
- (3) (2) を克服する社会科教育理論（理論仮説）を創造する。
- (4) (3) に基づいて社会科教育実践を創造・改善する。

2 研究方法の基本原則（梅津提案の整理）

- (1) 1の(1)～(3)
- (2) 社会科教育理論（理論仮説）の展開に用いられる概念は、社会科授業実践の事実により検証（反証）できるように定義する。
- (3) 社会科教育理論（理論仮説）の展開は、統一した方法を保持しなければならない。
- (4) 社会科教育研究の固有の方法は、社会科教育に関わる事実を、目標・内容・方法から捉えることである。
- (5) (4) の目標・内容・方法の相互の関連を説明されなければならない。

3 鳴門社会科教育学会研究大会シンポジウムにおける授業研究への示唆

シンポジウム主題 授業カンファレンス

「社会的判断力」育成の社会科授業をいかに構想し、実行するか

(1) シンポジウムの進行

- ① 坂田大輔実践「震災からの復興を考える」のビデオ視聴と基調提案
- ② シンポジスト① 子どもに視点を置いた考察 早川和美（松茂町立松茂小学校）
- ③ シンポジスト② 教師の授業力に視点を置いた考察 井上奈穂（鳴門教育大学）
- ④ 総括コメンテーター 米田豊（兵庫教育大学）

(2) 坂田大輔からの基調提案

- ① 判断場面の位置付け
「4月1日に防災服をやめた政府の判断に賛成できるか。」
- ② 論点（対立軸）
 - i 被災地の復旧を最優先させ、基本的人権の尊重という考え方に重きを置いて政治を進めるか。
 - ii 国民の代表者として国民の願いを実現し、国全体の政治を進めるかという国民主権と関連する考え方に重きを置くか。
- ③ 判断のさせ方（方法）＝他者の判断の吟味
「今回の判断場面も、すでに起こったことであり、この政府の判断に学び、明日の社会をつくることに生かす子どもを育てたいと考えた。」（基調提案）
- ④ 判断場面の類型（第48回全小社徳島大会）
表現吟味型 なぞり型 選択型 優先順位型 賛否型 歩み寄り型

(3) 早川和美による分析、検討

「子どもの実態と社会的判断力育成の課題」を子どもに視点を置いて考察した。

(4) 井上奈穂による分析、検討

① 「社会的判断力」の定義

社会的論争問題を解決するにあたって、
事実に基づき、根拠を明確にしながら、
自らの意見としての判断を下すことができる力

② 子どもの判断の構成

事実→理由付け→価値の表明

③ 「社会的判断力」育成を目指す社会科授業の成立要件

- i 自らの判断を根拠に基づいて下すことができる子どもの育成
- ii 個々の経験から「判断」しやすいが、「社会的判断力」につながっている論点の選択
- iii 子どものやり取りに見られる「論点の転換点」を捉える力

(5) 総括コメント（米田豊）

① 「判断」「社会的判断力」の定義がなされていない。そのため、シンポジウムの議論が拡散してしまった。

② 目標と指導と評価の一体化（3つの整合性）

i 単元の目標 「社会的判断力」についての目標がない。

(2)「思考・判断」と考えられる。 「判断」「社会的判断力」を問うていない。
～国民主権と関連付けて考え、考えたことを表現することができるようにする。

(4)「知識・理論」と考えられる。 本授業のゴールはここにあるのか。

国民生活には、地方自治体や国の政治の働きが反映していることを理解できるようにする。

ii 本時の目標 「判断」「社会的判断力」を問うていない。

「4月1日に防災服をやめた政府の判断に賛成できるかどうかを伝え合い過程で、国民主権と基本的人権の尊重という2つの観点から、国民生活の安定と向上を図る国の政治の働きについて考えることができる。」

③ 授業仮説の明示

「授業研究のテーマ」

子どもたちが根拠とした情報を観点別に板書し、観点ごとに主張の妥当性を問い返すことにより、情報に価値付け、意味付けを行い、自らの主張を再構築する子どもの姿が見られるか。

「判断」「社会的判断力」が組み込まれていない。

④ 「社会的判断力」をどう捉えるか

i 事実判断、価値判断（「何ができるか」ではなく、「何をなすべきか」）

ii 坂田実践は、「事実の分析的検討」を2つの観点から行い、「国民生活の安定と向上を図る国の政治の働きについて」事実判断をさせているのではないか。

4 本プロジェクトとの関連 すぐれた授業の条件

(1) 目標

- ① 目標と指導と評価の一体化（3つの整合性）
- ② 方向目標から達成目標へ

(2) 授業評価

- ① 本時の目標の達成＝子どもの学びの評価
- ② 研究テーマの達成＝教師の授業力（？）の評価
- ③ 研究仮説、授業仮説の達成＝？

(3) 授業仮説

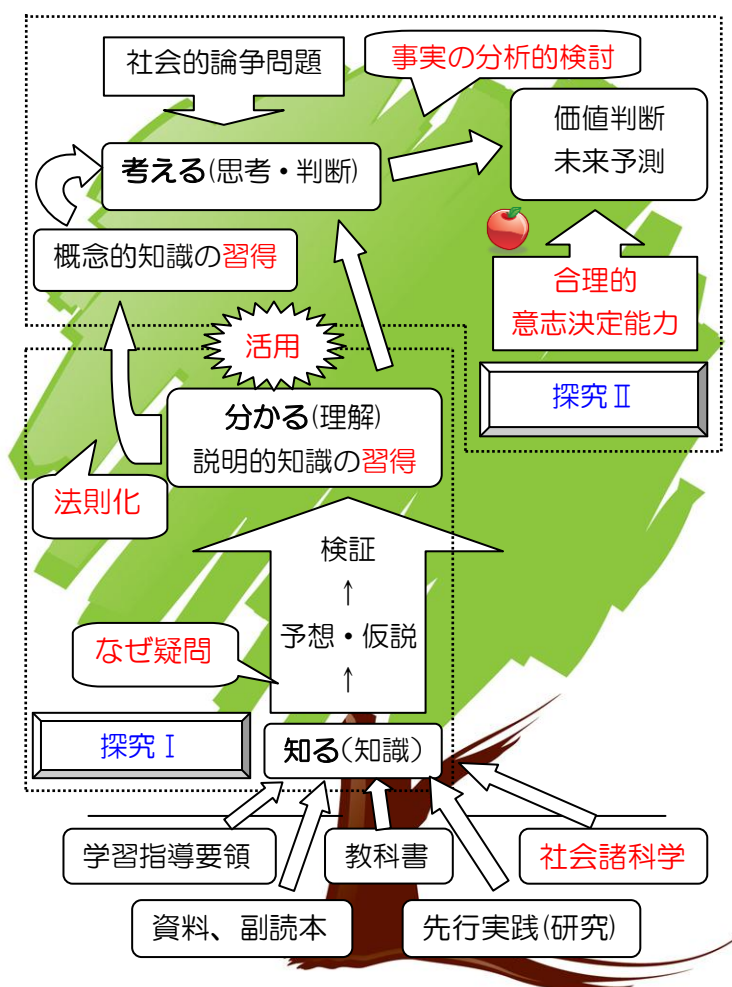
「指導案は仮説の集大成である。」

「授業研究は授業仮説の有効性の検証の場である。」

「授業仮説は自らの授業理論の明示である。」

多くの学校や研究会の事後検討会では、授業理論、授業仮説（授業のウリ）が明示されないため、感想的な意見の述べ合いに終始する。指導案は、読み手に読み解きを要求してはいけない。授業仮説の指導案への位置づけ、明示が課題である。

「社会的判断」を定義し、それを達成するための授業仮説を明示し、授業過程への位置付けを示してあると、事後検討会が活性化したはずである。



社会科の木(恒吉泰行・米田豊 2011)